

枚数表示

1/3

受験番号

問1 次の語句群の中から五つを選択し、説明を加えよ。(一五点)

- ①用間加条伝目口義 ②スッパ ③御庭番 ④マキビシ ⑤義盛百首  
⑥石川五右衛門 ⑦龕灯(ガンドウ)提灯 ⑧東映太秦映画村  
⑨横山光輝『伊賀の影丸』 ⑩和田竜『忍びの国』

問2 忍者の用いた暗号術について、具体例をいくつかあげながら、その特徴について述べよ。(一五点)

問3 別紙資料A・Bについての史料問題a・bのうち、どちらか一題を選択し、答えよ。(二〇点)

a この文章は大久保彦左衛門「三河物語」の一節である(『日本思想大系26 三河物語 葉隠』(岩波書店、一九七四年)の文章を一部省略)。この文章の大意と、この文章中における伊賀者の役割について述べよ。

b 資料Bは『万川集海』の巻十一「陰忍一 城営忍篇上」の一部である。読んで次の問いに答えなさい。底本は内閣文庫本を用いた。翻刻にあたり、原文のカタカナはひらがなに変更。読点を適宜もうけ、漢字は通用の字体に改めた。\*のある語は本文末尾に注がある。

(1) 傍線部①「かけつく」の内容と「祭礼の日」におこったことを現代語でわかりやすく説明しなさい。

(2) 傍線部②「是は陽中に陰を用ひたるなり」とは忍術としてどのようなことを指しているのか。本文にもとづき具体的に説明しなさい。

枚数表示 2/3

受験番号

○川屋城主水野信近、伊賀者に暗殺さる。

忍び取 敵城に忍びよってこれを乗つとること。  
伊賀衆 ↓補  
カイガハ敷 甲斐甲斐しい。頼りになるような。  
夫・荒子 人夫・雑役者。  
小小将 ↓補  
熊村 善海郡。  
二の手 二番勢。  
伯父・御子 ↓補  
ヲクレテモ有敷 気おくれしたのか。  
惣 和玉篇「惣、ヲソル」。オソル(怖)をオソシ(選)に誤用か。  
愛々ハト思ふ衆 これこそはと思われ者。えりぬきの者。  
乙名 老臣。家老。  
此方ハ何トト… ここはどうか、と  
いったのに対して、あわてたことを  
いうな、大丈夫だといって、の意。  
酷 字鏡鈔「酷、アハテタリ」。  
倍 字不詳。

然処に、今河殿より鷹屋(刈谷)之城ヲ忍び取に取ント、伊賀衆ヲ喚寄付ケリ。水野藤九郎(信近)殿は悟氣ノ深キ故に、城之内にカイガハ敷人ヲ置給て、年寄タル台所人之様なる者、夫・荒子其外、年寄・小小将(姓)の様なる約(役)にも立たざる者共ヲ取集て、四五十人計居タリ。其故(上)、熊村ト云郷に目懸(差)ヲ置給えバ、其え通イ給ふトテ、浜手の方ヲバ人之行通イナケレバ、聞き懸て、浜之方より伊賀衆ヤス〜ト忍入て、藤九郎殿ヲ打取。其外之者共ヲ此方彼方え押寄〜、皆打取て二の手ヲ待ケリ。其時、岡崎衆ヲ二之手にスルナラバ、無難城ヲ取カタメベキ物ヲ、水野下野(信元)殿は、竹千代様之御タメにハ、眼前の伯父、藤九郎殿は、下野殿にハ御子、竹千代様にハ御イトコナレバ、其に心ヲ置敷。岡崎衆にハ申不付シテ、二ノ手ヲ東三河之衆に申被付ケレバ、ヲクレテモ有敷。二ノ手惣ケレバ、鷹屋(刈谷)衆之、愛々ハト思ふ衆ガ、早悉 乙名之牛田源番(文善)(近長)所え懸寄て、「此方ハ何ト」ト云ケレバ、源番(文善)云、「何ト」ハ酷(備)「トテ、即 倍程に、其儘城ヲ騎(乗)取て、伊賀衆ヲ八十余打取。

入学試験問題

試験科目〔専門科目：科目名 忍者・忍術学 〕

枚数表示
3/3

受験番号	
------	--

山田八右衛門、去る者とかけつくにして汝が刀を取べしと云ひ、取らるましきと云時、八右衛門左あらば一宮祭礼の日白昼に取んと堅くかけに約を定め、扱祭礼の日に成ければ八右衛門田蓑田笠を著て彼者を誘引し先立て行、彼者思ふ様八右衛門をさへ見はなさずんは刀を取らるへき様なしと思ふて八右衛門に目を放さず行たり、其時八右衛門長田と云村の在家え走り込けり、元より巧み置たることなれば己か形の如くに弟子を拵へ彼家に置、己れは留り裏口より彼弟子を出し一宮より五町はかりこなたの小山の上に居させけり、彼刀の主山上に居るを八右衛門と思ひ山下に良久しく守り居けれども、終に山より下りざるによつて退屈して固く人に守らせ置き己は明神へ社参したり、其間に八右衛門は姥と化し大綿帽子を蒙り鰐口の下に群集ともに紛れ居て待居たり、祭礼の日の事なれば鰐口の緒奪ひ合ひ、折柄刀の主も来て鰐口の緒を取り付、何心もなく鰐口をうちならず処を賽銭箱の向ふより刀の身ばかりを抜取たり、取られたること知らずして群集を押し分て出たるに馬場にて刀を見せ高言したりと云々、是は陽中に陰を用ひたるなり、前陰後陽、始陽終陰の術。陽中陰。陰中陽の術、古人の為たる謀計多しと云ども、先大概を記して時宜に随ひ陰陽交々用て一偏にかたよらす全く勝を取ることを知しむるもの也

注

\*かけつく 賭け事。

\*鰐口 神殿の軒先につるしてある円形・中空で、下方が横長にさけている銅製の具。その前につるした太い緒をつかつて打ち鳴らす。



